

「患者にとってのアウトカムは、患者ごとに異なる」

松田清人（大学院生）／10月25日

りか様のご講演、そして瀬戸山様のご説明、ありがとうございました。

私は、製薬企業に43年間勤め、今年の1月に退職し、医療福祉ジャーナリズム分野の大学院2年生として勉強しています。

修士論文は、「精神病床を有する病院に入院している認知症のある人の身体拘束を減少させる～地域差の要因を明らかにし考察する～」という題目で、今は、インタビューを実施しているところです。私にとって本日の講演は時宜を得たものとなりました。

「患者にとってのアウトカムは患者ごとに異なる」という当たり前のことに納得、NBMの正しい概念を認識しました。

例えば、ある癌のアウトカムを「死亡率を減少させた」や「腫瘍の大きさを50%削減した」におくことは、数字上の評価で誰が見ても理解できることです。しかし、未達成の当事者にとって「幸せな人生をおくりたい」という価値観で見れば、満点であったかもしれないし、逆に達成した当事者の中には「こんなに痛みに苦しむなんて」と感じている人がいるかもしれません。

医療法人・わかば会俵町浜野病院のホームページに、『現代の医療は、大多数の人々を対象に行った臨床試験の結果から導き出された、科学的根拠に基づいて行われています。集団から得られた有効性のある診療を行うこうした医療を、Evidence Based Medicine (EBM)とといいます。しかし、集団から得られた結果をすべての人に当てはめることは問題もあります。人には個性があり、人生や健康、病に対する価値観がそれぞれ異なります。ですから、最良の医療を提供するのに集団から得られた結果を当てはめることが適切ではない場合もあります。つまりEBMだけが医療の中心となるものではないのです。患者さんには生きてきた人生、「物語」があり、信念があります。Narrative Based Medicine (NBM)においては患者さんを対象ではなく「主体」として尊重し、「病」を人生という大きな物語のなかで展開する「一つの物語」ととらえます。患者さんを「病者の物語」の語り手、病の経験の専門家として尊重します。医師の経験や学識、さらにEBMは医療者側の物語として捉え、診療方針は両者の物語を擦り合わせ、新たな物語をつくりだしてゆく中から導かれます。』とありました。

りか様や瀬戸山様が取り組んでおられる、医療を受ける立場の価値観をベースにした

“語りの献血”事業が、多くの患者さんへ知られ、広がっていくことを心から祈念いたします。

お礼にかえて、宿題である DIPEX に替わる「名前」の候補として以下を提案いたします。

- 患者の物語り
- 患者のナラティブ
- Patient ナラティブ
- Patient Narratives by DIPEX

「ナラティブ」というキーワードには、医療に関連する意味合いが含まれていると思います。また、「昔々あるところに・・・」という「物語り」のイメージも感じ、親しみやすさを覚えます。

「聞いてみたいな」と思う患者さんや家族にとっても、イメージが湧くのではないのでしょうか。

(松田清人)